

琉球王国の恵まれた国際的な環境と モンゴル帝国との関係を探る

何 俊山

A Study on the Correlation between the Mongolian Empire and the International Environment that Contributed to the Rise of the Ryuukyuu Kingdom

He Junshan

In exploring the rise and fall of the Ryuukyuu Kingdom from Syunten King, Eiso King, and Satsuto King to the first Syou Family Dynasty and the second Syou Family Dynasty, this paper attempts to trace back the formation of the Mongolian Empire and to analyze its influences. Meanwhile, the similarities and correlation between the Ryuukyuu Kingdom and the Mongolian Empire are investigated.

はじめに

今日の沖縄の地にできていた琉球王国が1429年に成立して以来、1879年に明治政府による「廃藩置県」まで450年間も存続していた。さらに、1372年の中山王察度による中国の「明」への入貢より数えると、500年間も続いていた、「海上貿易」を立国の方針として、中国の「明」と「清」政府の強い支持を得ながら、栄えた歴史や輝かしい文化を作ることができた琉球民族は、世界史においても、称賛されるべき民族¹だといえよう。いわば、今日の沖縄人に属する誇るべき文化のほとんどはこの琉球民族であった時代に創造されたものである。

今までの研究では、琉球王国の成立過程や繁栄ぶり、中国との入貢関係等に関する諸問題はほとんど明らかにされているが、琉球王国が栄えた原因と背景という問題がまだ残っている。これを考える場合、琉球王国の存続した期間と

中国による保護や中国への入貢貿易の時間とほぼ重なっていることを鑑み、中国一辺倒のおかげだと思われるのであろう。さぞ誰もがモンゴル民族あるいはモンゴル帝国の面影を思い起こすことがないであろう。

モンゴル語の民族、種族、部族、氏族に対するあらわし方を参考にすれば、モンゴル高原における民族形態への理解に有意義なことであるかもしれない。モンゴル語で民族を「ündüsüten」と言うが、このことばには、国家の意味もある。この単語は「ündüsün」（根）から来ており、同じ根を持つ人々を指す。民族と国家をひとつの単語で表す意味で英語のnationとは同じ発想によるであろう。種族をモンゴル語で「ugsagatan」と言うが、この単語は「ug」（源）に由来している。つまり、種族は起源が同じ人々の集まりである。普通、モンゴル高原では、ひとつの種族にはいくつかの部族があるが、モンゴル語は部族のことを「yasutan」と言う。これは「yasu」（骨）という語から変わってきて、つまり、同じ骨（血統）を持つ人々の集団を部族という発想である。氏族は、モンゴル語で「obog」という。この単語の翻訳は、ロシアのモンゴル語学者、歴史学者ウラジミルツォフによるものであるが、アメリカの文化人類学者バイクン女史によると、種族世系集団と言う意味である。村上正二が日本語の「氏」と同じと考えている。いずれにせよ、「obog」は古代モンゴル部族社会の基礎集団しかも父系親族世系集団であることは間違いないであろう。

間野英二がその著書『中央アジアの歴史』のなかで、モンゴル高原の遊牧民の民族形態について、次のように述べている。「遊牧民のもっとも小さな社会的単位は、ひとつのテントに同居する家族である。これらの家族は、普通、共通の祖先を持つと考えられている他の家族とともに、ひとつの遊牧集団を形作ってともに遊牧した。共通の祖先を持つと言う意味において、このような遊牧集団を氏族と呼ぶことができる。また他のいくつかの氏族と合して、ひとつのより大きな遊牧集団を形成した場合、これを部族と呼び、それらの部族がさらに他の諸部族と合して、より大きな単位を構成した場合、これを部族連合体、あるいは国家と呼ぶ。」という。〔間野英二 昭和60年：30－31〕

このようにして、モンゴル高原の民族形態を構築している要素のなかには、当然遊牧家族がもっとも基本的な単位をなすが、しかし、遊牧という生産形態を形作るのは家族ではなく、家族よりもっと規模が大きい、いくつかの家族よ

り構成されている、共通の祖先をもつ集団一氏族がある。モンゴル高原の遊牧社会における基本的な組織は氏族である点で、アメリカ・インディアン社会と共通である。ところが、モンゴル高原とインディアン社会との違いは、後者にいくつかの種族があって、言語や境界も種族と一致しているのに対して、前者に種族のイメージがきわめて薄く、もっぱら部族を中心に歴史を動かしたような感じが強い。しかも、インディアンの場合は、いつまでも国家をつくらなかったけれど、モンゴル高原では、あいついでいくつかの遊牧帝国が誕生していた。それらの諸遊牧帝国はまったく種族の境界を越えており、直接部族連合によって構成されていたところに特色があるといえる。

ところが、一つの民族あるいは国家がその歴史上において、栄えるか衰えるかの道を歩むのは、内部の団結力の有無とそれを囲む外部の、いわゆる国際的な環境によって決めつけられることが多い。もちろん、英雄たちの役割、偉人の登場、民族性の立派さ等の要素も必要欠くべからざる条件である。

外間守善がその『沖縄の歴史と文化』（中公新書1997）のなかで、沖縄の歴史と文化を考える場合、東アジア、東南アジアだけにとどまらず、広くインドネシア、メラネシア、ミクロネシア、ポリネシア等の太平洋文化圏およびインド洋にわたる幅広い視野に及ぶべきだと主張している。これは、沖縄の地域的役割を広げ、なお、その歴史的重要性を高め、文化的特性をまわりのいくつかの国や地域の影響と関連付けて考える、鋭い目だといえよう。外間守善こそが琉球王国—今日の沖縄の歴史と文化を見る目を、幅広くアジア全体と太平洋文化圏まで広げていくべきだと主張する第一人者であろう。

なお、外間守善は考古学と形質人類学の理論や知識に基づいて、縄文人、和人、沖縄人、中国の柳江人およびモンゴロイドと思われるアイヌ人の間に血縁関係があると説くとともに、太平洋文化圏とインド洋文化圏にその所在を認める沖縄の文化を説明する際、具体的な例として、神話学と琉球音階を挙げている。こういった説明から、わたしたちは確かに沖縄文化の多様性と豊富性を認めることができる。

このように、沖縄の歴史の変遷と文化のユニークさを形成した背景というものを考える場合、外間守善の次のような発言を思い出せば、きわめて有意義だといえよう。「四海の波動は、地理的にも歴史的にもさまざまな形で沖縄にう

ねり寄っていたであろう」²と云い、まわりの地域や国々による沖縄の歴史や文化への影響を認めている。また、「はじめて沖縄の歴史が動き出した十三世紀から十五世紀にかけては、東アジア、東南アジアの歴史も激しく動いた動乱の時代であった」³ことを言及し、具体的な時代区分を明らかにした。続いて、「沖縄史もアジア全域の歴史的動きの触発を受けながらの胎動であった」⁴と結論付けている。外間守善は13世紀から15世紀までの東アジアの歴史的変動に目を配るとき、日本、朝鮮、中国という三カ国を同じ水平線で比べているが、特に「元」が滅んで、「明」国の誕生やその影響を注目していることがわかる。東南アジアを論じる際、ジャワのマジャパイト王朝、当時のシャム、今のタイのアユタヤ王朝、マラッカ王国等の成立を全部十三世紀にわたって「元」軍によってもたらされた変動の結果だと認めているとともに、これらの国々と後の琉球王国と深い関係があることを主張している。

周知のように、琉球王国はその成立以来、「明」国の「海禁」⁵という国策に乗じて「明」との友好関係をうまく利用し、東アジア、東南アジア、インドやアラビア海沿岸の国々との間で盛んに「海上貿易」を行っていた。まさに「万国の津梁」という役割を果たしたわけである。文化的にはそれらの地域や国々の影響を強く受けたことも事実である。

そもそも、当時の「明」国がとった「海禁」という国策の背後にはどんな要素が考えられるのか。なぜ琉球王国だけが「明」と「清」の後援を得ることができたのか。また、当時の東南アジアやインドおよびアラビア海沿岸をめぐる国際的な環境はどんなものであったのか。

以上、外間守善の論述の延長線上のものとして、琉球王国の成立と繁栄の原因と背景を考察する場合、筆者は中国の「明」以前に国を建てた「元」およびモンゴル帝国による琉球王国への影響の実相を探りたい。その影響は直接的なものと間接的なものに大別されよう。

1. モンゴル帝国の成立過程およびその影響

1-1. モンゴル・ハン国の誕生までの経緯

12世紀のモンゴル高原には多くの遊牧民、狩猟民の部族が存在しているが、かれらは統一した政権がなく、各部族間の軋轢や紛争が相次いでいる状態に置

かれていた。ただ一つだけ言えるのは幾世紀にわたった接触、交流、融合の結果、言語・信仰・風俗習慣などの面において、高度な一致あるいは接近が成り立っている。著名なモンゴル学研究者の話を借りれば、モンゴル化がだいたい完成しているということである。⁶この文化的統一性がむしろ統一した民族を形成する兆しへ向けて発展する基礎的な条件である。その上、長い間の戦乱や征伐に対して、もはや飽きてしまうし、極めて嫌になったという心情を持つ遊牧民や狩猟民たちは平和と安寧および統一した政権の誕生を待ち望んでいるといえよう。

民族を形成する物質的・精神的諸条件がすでに揃っている場合、後残るのはこの歴史的気運が高まるなか、すべての部族の意志をまとめる強力な偉人の誕生を待つしかない。1162年にモンゴル族の黄金家族にテムジンが生まれた。彼は生まれた途端、右手の掌に血の塊をしっかりと握っているそうで、当時のシャーマンの話によると、将来きっと立派な君主になるであろうと言われた。⁷

モンゴル・ハン国を作ったテムジン後のチンギス・ハンは少なくとも以下のような有利な環境や逆境に恵まれ、彼自身も次のような個人的な素質を持っているということをいままでの研究でわかる。第一、9歳で父親のイエスゲイ・バートルに死なれたテムジンは、幼少年から父親の愛や保護を失い、長男として家族全員を養う責任を背負うことになった。第二、黄金家族に生まれた彼は、四世祖のカブル・ハンをはじめとする諸先祖たちの作りだした栄光を発揚する使命感に駆られ、また同じ四世祖のアンバガイ・ハンや父親という幾世代の敵一タタル族への恨みや復讐の決心によって励まされた。第三、当時モンゴル高原における最も強い実力者一ケレイト族のトオリル、つまりオン・ハンの熱い支持や保護を受けた。このオン・ハンも父親イエスゲイ・バートルの親友だけではなく、父親の恩を受けた人で、まさに父親がテムジンに残してくれた一番大切な「お土産」である。当時の遊牧民や狩猟民たちの価値観に従い、恩を受けた人が必ず恩を施した人に恩返しをしなければならない。幼い時から愛する父親を失ったが、結局モンゴル高原の諸部族を統一する直前まで父の親友のオン・ハンによる保護を受けて徐々に強くなった次第である。そして、第四、後侵攻する対象になったが、初期においては、やはり「金」国から庇護を受けていた。これらはみな彼のモンゴル民族を統一する偉大な事業に拍車をかけた要

困であった。

彼個人の素質に関して、フランスの歴史学者グルセの『草原帝国』によると、テムジンは背が高く、がっちりした体つきで、広い額の下にいつも猫のような鋭い目つきが輝いており、晩年に至ってはひげを生やしていた⁸という。また平素、羊や牛および他の動物の肉を食い、牛乳やヤギの乳および馬の乳で作られたお酒を飲み、タンパク質を十分取ったモンゴル相撲選手さながらの丈夫で健康な体の持ち主である。

彼は、弟たちの手助けもあって、幾度の苦汁を飲まされ、さまざまな困難を乗り越え、タイチウト族、メルキト族、タタル族、ナイマン族、ケレイト族等の強い敵を打ち破り、とうとう1206年の春にモンゴル高原のモンゴル諸族やチュルク諸族をモンゴル民族の旗の下に統一した。テムジンすなわちチンギス・ハンは44歳でモンゴル・ハン国を作った。そればかりではなく、チンギス・ハン自身の手によってモンゴル民族が作られたともいえる。それ以前、モンゴル族はただ一つの部族としてモンゴル高原に存在していたわけである。

以後、チンギス・ハンとその子孫がモンゴル遠征軍団を率い、中国、ロシア、インド、ペルシア、中央アジア等の地を征服して、モンゴル帝国を建てた。その時間は13世紀においてであった。モンゴル帝国はユーラシア大陸にまたがっていた。モンゴル族も一つの部族から民族まで成長し、全世界にその名を馳せることができた。

1-2. モンゴル帝国の成立過程

以上述べたモンゴル・ハン国の誕生はモンゴル高原のモンゴル諸族やチュルク諸族および一部のツングース語部族を一つにまとめ、すなわち統一した遊牧民国家を作ったということを示し、と同時に、もっと規模の大きい、必ずしも同じ言葉を話さない、別の意味から言うと、新しいモンゴル族の誕生を意味したのである。それで、モンゴルという名前は一つの部族名から民族名に変わったわけである。

モンゴル・ハン国の誕生は以上述べたように、歴史的な気運、民衆の願い、遊牧社会の発展の趨勢もあるとともに、何よりもチンギス・ハン本人の個人的な魅力やその大家族の実力によるものが多いと言わざるを得ない。彼本人の個人的魅力といえ、以上述べた、たくましく健康な体に家族を維持するため

の責任感に先祖の偉業を受け継ぐ使命感以外に、敵やあらゆる危険を恐れない勇敢さ、どんな困難にぶつかっても負けない粘り強さ、寒さや暑さ、苦しみや悲しみに勝つ忍耐力、政治的な臭覚の鋭さ、正義や部下を固く守り、長年にわたって形成された草原の掟をきちんと守る、いわゆる保守的な遊牧民であり偉大な指導者のイメージである。彼は信義を重んじ、裏切者をけっして許さない性格を持っている。モンゴル高原の慣習法、チンギス・ハンのすべての言行、クリルタイで決定された事項等を記録した「大ヤサ」がモンゴル・ハン国およびその後のモンゴル帝国においても全国の不動の法令として貫かれていたのである。

本来モンゴル高原という地域的空間とそこの民—モンゴル諸族やチュルク諸族をまとめて、そこに一つの遊牧民政権—モンゴル・ハン国を作ったからには、そのまま国家の内政に力を入れ、もっぱら治国事業に専念すべきだったが、まさに筆者が小学校で習ったモンゴル語テキストのなかに述べられているように、チンギス・ハンおよびその子孫がノヤンたちの要求に応じて、対外戦争を起こした。すなわちモンゴル帝国建国の道を歩み始めたわけである。いわゆるノヤンたちの要求ということはモンゴル高原だけにとどまらず、もっと西の方へ豊かな草原を探すと同時に、もっと南の方へ中国の物産を目指したのである。モンゴル帝国を作ることはチンギス・ハンの夢であり、モンゴル・ハン国が出来上がった際、いわばそれ以後の発展の趨勢となり、チンギス・ハンの黄金家族をはじめとする各部族の長たちの固い決意でもあった。

1204年に当時のテムジンがナイマン族を滅ぼした際、ナイマン族の印鑑管理官タタトンガを中心に「ウイグル文書処」を作り、またタタトンガにわが息子たちにウイグル文字を教えさせたのである。1207年に長男ジョチに兵を率いさせ、イェニセイ川上流に遊牧しているキルギス族やオイラト族等の部族を征服した。1208年にチンギス・ハンはモンゴル全域を完全に制圧し、後顧の憂いが完全に除かれ、今度こそ征西事業に踏み入ったのである。

合わせて13万人のモンゴル軍勢は、1218年にハラキタイ国を滅ぼし、1221年にホラズムを攻略し、1227年に西夏を征服し、1234年に「金」国を滅ぼし、1279年に南宋を滅ぼした。もし1241年12月でのオゴタイ・ハンの死がなければ、モンゴル軍勢はヨーロッパ全域を制圧したにちがいない。それにもかかわらず、

モンゴル軍はポーランド、ハンガリー、ドイツのドノウ川まで進軍し、1242年から南ロシアを支配下に置いた。

簡単にモンゴル軍の征服地域をまとめると、1258～1287年にアンナン今のベトナムがモンゴルの宗主国地位を認め、1258年に朝鮮国王がモンゴルに臣下を請うた。1280年に今のシンガポールが、1297年にビルマが、1294年にカンボジア、タイ、ジャワがそれぞれモンゴルの宗主権を認めた。なお、1274、1281年にフビライの「元」国は二度にわたって日本へ侵攻したが、台風のため失敗し、結局日本を征服できなかった。琉球にも進軍したが、目的が達成せずに失敗に終わった。

チンギス・ハンの孫であるフビライ・ハンが建てた「元」という国が1271年から1368年にかけて97年間中国に続いた。「元」以外に、またモンゴル帝国の四大ハン国がある。同じ孫であるバトゥ（ジョチの次男）が建てたキプチャク・ハン国はロシアの草原を中心に1243年から1502年にかけて260年間も続いた。同じ孫であるフラグ（トルイの三男）が建てたイル・ハン国は1258年から1353年にかけて95年間ペルシア、インドに続いた。オゴタイ・ハン国（中央アジア東北部）は1229年に建国したが、1306年にチャガタイ・ハン国（中央アジア西部）に併合された。一番長く存続したチャガタイ・ハン国は1227年から17世紀まで中央アジアを支配していた。結局、「モンゴル旋風」が13世紀から巻き起こして、17世紀にやっと中央アジアに止むことになった。東ヨーロッパとアジア全体を覆った軍事力の表れであった。

1-3. モンゴル帝国の貢献および影響

一つの部族としてのモンゴル族はチンギス・ハンが生まれた12世紀後半当初、まだ周囲のいくつかの強大な部族の略奪や侵攻対象となったが、チンギス・ハンが成長していくにつれて、モンゴル高原の情勢がどんどん移り変わり、ますますチンギス・ハンの代表する集団に有利な方向へ発展していくのであった。いうまでもなく、モンゴル・ハン国もモンゴル帝国もモンゴル族を中心とする軍事力に頼って建てられたものだといわなければならない。それでも、1227年にチンギス・ハンが死んだとき、彼が残したモンゴル軍勢は12万9千人しかいなかった。⁹そんな少ない人数の軍隊でどうしてユーラシアにまたがるモンゴル帝国を作ることができたのか、という疑問は常に不思議な謎として世界各国の

研究者に投げかけられている。

モンゴル帝国はモンゴル本土以外に、中国、ロシア、インド、ペルシア、中央アジアを含め、その面積が3000万平方キロメートルに及んで、いままでの人類の歴史においてももっとも広い帝国である。¹⁰人口の規模から言うと、モンゴル帝国がかつて支配していた地域や国家の国民のなかには、すくなくとも1600万人がチンギス・ハンおよびその子孫の後裔だと言われている。今日の中央アジアの国々の民族が形質人類学の面から見ると、モンゴル人そのものと少しも変わらない。

そもそも、チンギス・ハンをはじめとするモンゴル帝国の指導者たちが他民族の人々を殺すために征服戦争を起こしたわけではなく、あくまでもそれらの国々と外交関係あるいは属国関係を持つように願っていた。外交関係を結ぶ目的はやはり貿易でお互いに物質や情報の交換を果たし、また、人員の往来や文化の交流を目指すためである。遊牧民と狩猟民は生産資料と生活資料に乏しく、対外貿易を通じてそれらを手に入れるしかない。親交関係あるいは貿易関係を結ぶ願いが断られた場合、やむを得ず侵攻したのが常であった。ホラズムや日本に対して行った戦争はまさにその理由であった。ただ問題はモンゴル帝国のほうから出された親交関係を結ぶ要求が厳しいと思われることがある。たとえば、第一、モンゴル帝国に対して臣下を認めること。第二、モンゴル帝国によって派遣された官吏が現地で税金を徴する権利を承認させること。第三、その国の国王の王子様を人質としてモンゴル帝国の首都に滞在させなければならないこと。これらの厳しい条件を認めた国に対していっさい戦争を起こさない。事実、半分以上の国が以上述べた条件を認めなかったため、モンゴル帝国との間で戦争が起こったわけである。これは今日の観点からすると、強権政治としか言えない。このような強権政治は昔のモンゴル帝国にばかりではなく、今日の世界においてもよく見当たるのである。

以上述べたように、モンゴル帝国が他の民族や国と貿易関係を結ぶために、交流しようとしたところ、案外断られたという理由で侵略戦争を起こして、それらの国や地域の住民を虐殺した。当時、この原因でモンゴル人に殺された他の民族の人民が多数いた。これはいうまでもなくモンゴル帝国がそれらの人民に対して犯した罪であった。そればかりではない。侵略された地の人々から見

ると、モンゴル人はまったく野蛮人であり、かれらの家族や親戚、親友、隣人を殺しただけではなく、彼らの財産を奪い、町や都会、農地も破壊し略奪したのである。

しかし、モンゴル帝国によってもたらされたメリットも大きい。

第一、いままでよりも東西文化の交流を大いに促進した。

第二、アジア、ヨーロッパおよび一部のアフリカの国々の貿易往来を促した。

第三、さまざまな文明間の交流や触れ合いおよびそれぞれの発展に重要な役割を果たした。

第四、武力の手段を訴えて平和を保つモデルを示した。

第五、全世界にモンゴルの名を馳せることができ、騎馬民族の価値観や文化を広げた。

モンゴル帝国による支配下の国々、被征服地域への影響も大きい。

一つに、モンゴル軍勢の猛威による威圧で長い間武力を訴える勢力が現れないから、天下和平状態を保ちつつあったのである。

二つに、モンゴル人が宗教に対してきわめて寛容であった。モンゴル人自身がシャーマン教を信じ、長生天を尊び、後仏教特にチベット仏教すなわちラマ教を深く信じている。世界三大宗教—仏教、キリスト教、イスラム教はモンゴル帝国時代にもっとも自由で発展が早かったし、お互いに共存していた。当時の西方の宣教師たちが自由にモンゴル帝国に出入りしていた。これはまったくモンゴル人による寛容な宗教政策のおかげだといわなければならない。今の東南アジアや西アジア、インドなどの国々と地域の宗教分布はまさにモンゴル帝国の支配と無関係ではないであろう。

三つに、モンゴル人自身の生活の単純さ、生活用品の乏しさ、食物の不均衡などの原因で、交換すなわち商業をきわめて重んじている。モンゴル人には、商業貿易を保護し、職人を大事にする伝統がある。チンギス・ハン本人はもっとも信義を守る人で、征服した地域や国の職人を全員モンゴル人のために駆使していたのである。ホラズムがモンゴル軍に城のなかの守備隊や住民を殺された原因はまさに先にモンゴル帝国の商業団体の全員がホラズムのほうによって殺されたからであった。また、東南アジア、インド洋沿岸、アラビア海沿岸諸国の住民が仏教あるいはイスラム教を信じ、商業に長じている。モンゴル帝国

時代には、これらの国々の商業はモンゴル兵の保護のもとに、大きく伸びていたのである。

四つに、以上述べた三つの理由で、モンゴル帝国支配下の国々は安定な環境のもとで発展が早かったし、お互いの交流も盛んであった。国同士、地域ごとに今までと比べると、それ以上交易、交流、往来の機会に恵まれ、お互いに有無を通じるし、人民も業に専念することができた。

以上のような結論を裏付けるのにはマルコポーロの書いた『東方見聞録』がある。モンゴル帝国の支配下地域間の文化交流も盛んであった。もしモンゴル帝国がなかったら、後のポルトガル人、スペイン人、オランダ人たちによる地球規模の大航海時代も開かれることがなかったかもしれない。後、琉球王国の「海上貿易」あるいは「海上の道」を代表とする東アジア、東南アジア、インド洋、アラビア海をつながるような海上商業の道もモンゴル帝国の支配とは無関係であるとは言い難いであろう。なぜなら、モンゴル帝国の征服や支配によって後の数世紀にわたる安全でしかも活力に満ちた商業向けの国際的な環境が作り出されていたといける。これは、後の琉球王国による数世紀にわたる「海上貿易」が盛んになった所以であろう。

2. 琉球王国の成立と繁栄の原因および背景

2-1. 琉球王国の成立過程

冒頭にも述べたが、沖縄本島的那覇の山下洞人や具志頭の港川人などを代表とした考古学と人類学の発掘、研究の結果で分かるように、旧石器時代から新石器時代に至り、すくなくとも今日の沖縄本島には人類の活動した痕跡が見られ、これは日本本土、朝鮮半島、中国大陸にいつこう劣らない証明にもなる。日本本土の縄文時代、弥生時代にあたる沖縄の貝塚時代の代表的な文物は浦添市で出土した市来式土器と朝鮮半島から到来した須恵器、また中国南部の稲作農耕と鉄器の導入であるが、これをひっくるめて先史時代と名付けている。文字などの歴史記録がないため、考古学等の研究成果によるだけで、推測の域を出ないからだ。「沖縄の先史時代は長い間謎に包まれた」例として挙げられるのは柳田国男が日本人のルーツを「海上の道」に帰結するために注目した「宝貝のこと」と同じ日本人のルーツを北方の騎馬民族に求めようとした江上波夫

の注目した明刀銭とのつながりのことである。宮古島の隣の池間島の八重干瀬で取れる宝貝について中国の秦朝以前の戦国時代に当時の南海の特産品また通貨として使用されていたし、しかも珍重されていたことが注目されるべきである。また、同じ中国の戦国時代で通貨として使われていた明刀銭が那覇市の郊外で発掘されたということはけっして偶然なことではない。宝貝と明刀銭との間にはなんらかのつながりがあるわけである。古くから沖縄地域と中国大陸との交流があった証明でもあろう。

沖縄の歴史が次のグスク時代へ突入しようとした時期の文化に関する歴史記録として、中国の歴史書『隋書』の「流求国」の記事が読める。今日の沖縄を指すかそれとも台湾のことを指すかという疑いが投げかけられているが、記録自体が信じられよう。

琉球か沖縄かという呼び名について近現代において特に学界で盛んに議論された課題だが、アルタイ系言語のひとつとしての沖縄語は、r音が語頭に立たないというルールを守るわけで、琉球という語が本来の沖縄語ではない結論が得られよう。しかし、琉球は「東海の蛟竜」という意味で、沖縄は「沖に浮いている縄」と説明でき、結局この二語の含まれる意味が通じている。中国語という言語は物事を説明する場合、その外見を見てどんなものにそっくりあるいは似ているかによって形容の言葉を使って語る傾向がある。発音上の便宜で沖縄の人々が琉球という馴染まない発音よりも馴染みやすい「おきなわ」という発音を取って、「おもろさうし」に読んだのであろう。

636年にできた中国の歴史書『隋書』の「流求国」に現れた後、およそ500年間の歴史的空白期を経てやっと12世紀に入ってからまた登場した沖縄は同じ中国の歴史書『旧唐書』(945年)の「室韦伝」に出てから12世紀中葉に至るまで歴史から消えていたモンゴル族と通じている点がある。その間、何があったのか、歴史記録がないため、いっさいに知りようがないのである。

12世紀に入ってから登場した沖縄の社会は族長的性格を持つアヂ(按司)によって統治されていたことも11、12世紀のモンゴル族社会の様子とまったく同じである。沖縄の史書に伝えている25代も続いた天孫氏王統と『モンゴル秘史』の冒頭に伝えているチンギス・ハンの祖先が22世代にまでさかのぼるとまた軌を一にするのである。チンギス・ハンから上に22代もさかのぼることは記録

に依拠しているのではなく、モンゴル人の頭の記憶に基づいているだけである。草原の口承伝統である。

そして、天孫氏王統の後、尚巴志による沖縄全島の統一までの200年間は舜天王、英祖王、察度王の治世であった。12世紀から14世紀までの期間で、ちょうどモンゴル高原においてモンゴル族が台頭しモンゴル帝国を形成していく時期にあたるのである。この200年間はまさに沖縄社会において群雄がお互いに争い、最後に三山の対立時代に入ったのであった。この三山対立時代にモンゴルの「元」国から二回にわたって侵攻されたが、三山がうまく沖縄本島を守ることができて、1世紀半ぐらい後に尚思紹、尚巴志父子によって統一王朝—琉球王国が建てられた次第である。モンゴルと沖縄の違いはモンゴル部族によってモンゴル高原を統一したのは、短くとも半世紀足らずの時間を要していたのに対して、沖縄の場合、200年間以上もかかり、やっと1429年に三山統一できたのである。

2-2. 琉球王国の栄光

琉球王国を建てたのは尚思紹、尚巴志父子であったが、しかし、それ以前すなわち14世紀中葉から活躍し始めた歴史的英雄察度王から話を進めなければならない。なぜなら、まさにこの察度王こそが沖縄史上初めて中国の「明」と外交的な朝貢関係を結び始めたのである。1372年であった。明太祖朱元璋が「明」国を建ててたった4年後のことである。琉球はこの「明」との朝貢貿易を通じて速やかに富を蓄え、すすんで中国から文化を輸入した。当時、察度王の対「明」貿易の中心地は浦添の牧港であった。結局、この察度王によって始められた対「明」朝貢貿易はそれ以後いつまでも琉球王国の繁栄を支えていったものであった。

尚巴志による第一尚氏王朝がスタートし、国家経営の基盤として海外貿易を重んじるようになった。すなわち琉球王国にとっては海外貿易こそが国家発展の原動力であり、おそらく当時としての唯一の道であったろう。海外貿易以外に、琉球王国としてはサトウキビ栽培をはじめとする農業を発展したのであった。対内的な国造りの手段としては、首里城の建設やお寺、神社等の宗教施設の建造等があげられる。

琉球王国は「明」国はもちろん、それ以外にまた、遠くシャム、マラッカ、

スマトラ、パレンバン、ジャワ等の国々や地域と交易を行っていた。これによって、徐々に国家経済の基盤を築いていくのであったし、だんだん東アジア、東南アジア、インド、アラビア海沿岸に琉球王国の名を馳せていった。

ところが、この栄えた第一尚氏王朝はたった40年間続いただけで、すぐ第二尚氏王朝に変わっていくのであった。まもなく、尚真王の50年の治世によって琉球王国を最も輝かしい発展の時代に持ち込まれたのである。「明」国や東南アジア諸国との海外貿易の規模をもっと拡大し、国内の建設に力を入れ、王国全体を豊かにしたわけである。今日の沖縄の文化の大部分はこの尚真王時代に作られたし、海外から導入されたものが多い。外間守善先生が王国の成立と繁栄はこの海外貿易と不可分の関係にあると断言している。

以上挙げた琉球王国と海外貿易を行った国々はいずれも「元」国を宗主国と仰ぎ、前者の属国として「元」が滅んで、誕生した「明」国との間緊密な友好関係を保ち、そのおかげで、「明」国の海外貿易代理人相当の琉球王国と盛んに貿易関係を持っていたわけである。琉球王国は自国の土産はもちろん、中国の物産を東南アジア等の国々まで輸出し、そのかわりにそれらの国々の物産を中国に持ち込むことによって高い利益を得たのであった。東南アジアだけではなく、東アジアにおいて、日本、朝鮮半島との海外貿易も以前よりも盛んであった。また、インド洋、アラビア海沿岸の国々と盛んな海外貿易を行った。

2-3. 琉球王国の栄えた原因と背景への考察

内的な要因は何としても三山の統一の結果として、琉球王国という統一した政権の誕生があげられる。また、第一尚氏王朝と第二尚氏王朝という何人かの英明な国王の統治である。外的な要因としては、まず「明」国との朝貢貿易関係の維持によって得た利益が大きい。利益だけではなく、また「明」という大国による保護もきわめて役に立つのであった。外的要因のもう一つは本稿の論述しているモンゴル帝国の影響があげられなければならない。「明」国自体は「元」国を受け継いでいるし、琉球王国と海外貿易を行った国々がいずれも「元」国の属国であったから、この意味から言うと、琉球王国は「元」の遺産を受け継いでいるともいえよう。「元」は琉球王国が海外貿易を展開するためにもっとも都合のいい国際的な環境を作ってくれたのであるといえよう。これはいわば、琉球王国の栄えた直接的な原因である。

次に間接的な原因を見てみよう。これは「明」国の国家体質と関係がある。さきほども述べたとおり、1372年という「明」国が誕生したばかりのきわめていい機会に乗じ、中山王の察度によってはじめて「明」国へ入貢貿易を始めた。この意義が深い。なぜなら、「明」国が建ったばかりのとき、基盤もまだできていないし、海外諸国からの承認や入貢は待ちに待ったもっとも嬉しいことになったわけである。そんな場合、琉球王国に特別な待遇と政策を与えたのもけっして不思議なことではない。これはただ琉球王国だけにもっぱら最恵国待遇に相当する政策を施したゆえんであろう。

もう一ついわゆる間接的な原因は「明」国による対モンゴル族の「北元」政権の政策にある。「明」国はモンゴル人の「元」を倒したが、モンゴル族の勢力を全滅させたわけではない。むしろ、「元」という王朝自体が滅んでも、モンゴル人がモンゴル高原という根拠地に退去して引き続き「北元」政権を維持していたのである。結局、この「北元」政権はいつまでも「明」国の患いともなった。なので、「明」国の基本的な国策は「北を防いで南をいたわる」のであった。当時、「明」国は北のモンゴル人政権による南下を防ぐため、すすんでモンゴル高原に進軍したり、万里の長城を作って一生懸命に防いだりしていた。「明」国の財政の半分以上はこのモンゴル族の軍事力に対抗するのに費やした。1449年に「明」国の英宗が「土木の変」という戦争でモンゴル軍の捕虜までなった次第もあった。この政策は「明」の後を受け継いだ「清」国まで貫かれていた。「清」の初期、西モンゴル族のガルダン・ハンが「清」国に対立していたので、「清」国としては国家のほとんど全力で西モンゴル族と戦ったのである。これらの「明」と「清」の対モンゴル族の政策のために、むしろ対琉球王国の政策はきわめて優遇であった。北と南とは同時に戦争をしては、耐えられないからであろう。

おわりに

琉球王国が1429年に誕生して以来、第一尚氏王朝、第二尚氏王朝を経て、何人かの英明な国王の指導の下に、海上貿易を中心に、経済的に栄えだし、輝かしい文化を作ることができた。その間、中国の「明」と「清」政府の優遇政策のおかげで、「万国の津梁」として中継貿易を大いに進めていた。と同時に、

東アジア、東南アジア、インド、アラビア海沿岸まで琉球王国の名を馳せていたし、これらの国々からさまざまな文化様式を導入することによって、自国の文化に新しい血液を注いだ。琉球民族は誇りの民族だといえる。

その栄えた原因と背景を見る場合、モンゴル帝国からの直接的な影響つまり、東南アジアやインド、ペルシアなどの地域の要素を考察したし、間接的な影響としての「明」国と「清」国の対モンゴル政策を見回してみた。以上の考察でわかるように、琉球王国が栄えた背後には、モンゴル帝国によって作られた寛容で安全、また活力に満ちた国際的な環境があったのである。モンゴルと沖縄は数千キロメートルも離れているのにもかかわらず、歴史的にはやはりある関連性があることを確認することができた。また、両国の成立の背景としても、よく似ているところが多いことがわかった。

たいへん不完全な研究かもしれないが、新しい視点に立って、こんな関連の可能性について研究や考察を試してみた次第である。

註

1. スターリンの定義はすなわち、「民族とは、言語、地域、経済生活、および文化の共通性のうちにあらわれる心理状態、の共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された、人々の堅固な共同体である。」という。しかし、小坂井敏晶（小坂井敏晶2002）が「虚構」だと主張し、田中克彦が「人間が人間として存在するための積極的な基本形式」（田中克彦1991：109）、また「人間の基本的な存在形式」（田中克彦1991：100）だと見ており、カウツキーが言語共同体なのだと主張している。本稿は、民族を民族たらしめる決定的な要素は「民族意識」であり、「民族意識」は種族あるいは部族が国家をつくることによって醸成されると主張する。換言すれば、ある種族あるいは部族の連合が国家まで発展して初めて民族となる。民族であるからこそ「民族意識」をもつ。したがって、「民族意識」の存在はまさしく民族である象徴になる。国家は政治体であるのに対して、民族は政治体であるばかりではなく、また文化体でもある。民族は国家よりも高い次元をもつのである。国家と民族は一対一の関係にある。多民族国家のなかの諸民族は本当の民族ではなく、あれは種族である。かつて国家をつくったことのある種族、すなわち民族でさえ、もし現段階でみずからの国家をつくらず、他の国家のなかに包容されている場合は、やはり種族であると言わざるを得ない。なお、前近代の国家は多言語や多文化を許していたが、近代国家すなわち国民国家はそれを許さないであろう。それで、本稿は国家が民族に先行するという理論に支持する。
2. 外間守善 1997 『沖縄の歴史と文化』 中央公論社 P6
3. 同上。
4. 同上。

5. 「海禁」政策は「明」の初期から1567年まで貫かれていた「明」国の国策である。主に中国人による海外貿易を固く禁じ、海外からの商人の上陸を強く制限する内容のものを指す。許されるのは朝貢貿易だけである。伝統的な中国の海外貿易には二つのパターンがある。一つは政府によって営まれる朝貢貿易で、今一つは民間人による私的海外貿易である。朝貢貿易は海外の国が使節団を派遣して土地の物産を携えて貢物として中国の皇帝に捧げ、都で中国の皇帝のほうに招待されて皇帝からはその貢物の価値や数を数倍あるいは数十倍も超える中国の物産をただでもらって帰国することを指す。この行為は宗主国と属国の経済関係を体現するよりもむしろ政治関係を表す意味合いが強い。いわゆる経済関係が政治関係に従属する考え方である。中国の古代王朝国家は商業を抑制する基本政策を取ったからには、民間人による私的海外貿易は大きく制限されるかまったく禁じられる時期が長い。それで、中国の前近代の海外貿易は主に朝貢貿易を指す。もう一つ、「明」国が「海禁」政策を施行した原因は「元」国の時期から中国沿海地域に頻繁に現れた「倭寇」すなわち日本の民間密輸団体があったからだ。彼らはたまたみ海賊にもなるのである。
6. 『亦林真蒙古学文集』 2001 内蒙古人民出版社 P 389
蔡鳳林 2000 『中国農牧文化結合与中華民族的形成』 中国財政経済出版社 P 14
7. 度陰山 2015 『成吉思汗 意志征服世界』北京联合出版公司 P 1
8. 勒内・格魯塞(グルセ)著 李徳謀, 曾令先訳 2012 『草原帝国』 江蘇人民出版社 P129
9. 同上。P175
10. 同上。P129

参考文献

- 村上正二 1987 『モンゴル秘史1』 平凡社
 村上正二 昭和47 『モンゴル秘史2』 平凡社
 村上正二 1997 『モンゴル秘史3』 平凡社
 外間守善 1997 『沖縄の歴史と文化』 中公新書
 エンゲルス著 内藤吉之助訳 昭和27 『家族、私有財産及び国家の起原』 双文社
 ウラジミルツォフ著 外務省調査部訳 昭和17 『蒙古社会制度史』 生活社
 マルコポーロ著 青木一夫訳 1960 『東方見聞録』 校倉書房
 趙文 2013 『明朝後期対蒙古策略研究』 中央民族大学出版社
 度陰山 2015 『成吉思汗 意志征服世界』 北京联合出版公司
 『亦林真蒙古学文集』 2001 内蒙古人民出版社
 蔡鳳林 2000 『中国農牧文化結合与中華民族的形成』 中国財政経済出版社
 勒内・格魯塞(グルセ)著 李徳謀, 曾令先訳 2012 『草原帝国』 江蘇人民出版社